第Ⅰ章　位置と環境

第１節　位置と環境

寝屋川市は、大阪府の北東部に位置し、市域は、東西約6.9km、南北約7.2km、面積約25㎢、人口約24万人である。北西は淀川を限りとし、北は枚方市、東は交野市と接する。西は守口市、南は大東市・門真市・四条畷市と接しており、北河内の中央に位置する。東の生駒山西麓に連なる丘陵と、その西側に広がる平野部からなる。上垣内遺跡は市の南端、四条畷市を南に臨む丘陵斜面に位置する（図１）。

北河内地域は古代北から交野郡・茨田郡・讃良郡に分れ、上垣内遺跡は讃良郡に含まれる。讃良郡は山家郷・甲可郷・枚岡郷・高宮郷・石井郷を合わせたもので、上垣内遺跡周辺は高宮郷に含まれると考えられている。

讃良郡は『日本書紀』持統八年(694年)六月条に「河内国更荒(さらら)郡」と初出する。ただし、大宝律令前の記事とすれば、当初は「更良評」だったものを書きかえたと解釈すべきである。また、平城宮より「讃良郡山家郷人宗我部飯麻呂馬七匹得・・・」を記す天平十八年(746年)の墨書木簡が出土し、ほかにも断片であるが、養老年間に讃良の氷室からの貢納を示した荷札木簡が発見されている。したがって、奈良時代に「讃良郡」が存在していたことは間違いない。

『続日本紀』には茨田勝(まったのすぐり)、娑羅羅馬飼造(さららのうまかいのつくり)、菟野馬飼造(うののうまかいのつくり)など渡来系氏族や馬飼集団の名が知られる。『日本書紀』継体天皇即位前紀にあるヲオド王が河内馬飼首荒籠の勧めで樟葉宮(枚方市葛葉)に即位するという伝承と合わせ、興味が持たれる。近年、北河内の古墳時代集落で馬歯・馬骨・馬具などが発見され、河内馬飼に関わる集落の実態が明瞭になりつつある。馬匹生産や牧の設置は生駒山西麓に広がっていたようで、本遺跡の六世紀後半の集落もその関連が推測できる。河内馬飼関連の集落は五世紀代には百済や伽耶などの渡来系遺物が濃厚にみられ、半島の渡来人の痕跡が際立つ。ただし、六世紀になると渡来人も在地の人々と同化し、渡来系遺物の痕跡が明瞭でなくなる傾向にある。本遺跡においても、渡来系遺物は見つかっておらず、在地文化との同化や分岐を推測できるかもしれない。

さて、上垣内遺跡の垣内は全国によくみられる地名で、カイト・カイチ・コウチなどと発音される。これに関する地名・あざ名は全国的な分布があり、大和や河内に多く、近畿ではカイトと呼ばれることが多い。垣内とは、豪族居館や集落を垣根や堀で囲んだ内側を意味する場合がある。これ以外には、田畑に開墾することを計画して囲った土地区画を意味する場合もある。その意味や起源については、様々な研究があり、一律には解釈できないものの、開墾者の特殊権益を示す区画や私領を示すことが多く、荘園開発の進展に伴う地名らしい。未開墾地の開発は様々な形で行われたが、大和や河内では有力な荘園領主による大規模開墾以外にも荘民による小規模な開発があった。このような開発には、垣根や堀などで区画を明確にし、従事する人々の集落も営まれた。これらの集落と開墾された田畑以外にも、それを取り巻く里山などを含めて垣内と呼ばれることがあった。調査区周辺には上垣内以外に中垣内や下垣内などの地名もあり、低湿地のみならず、丘陵上まで田畑の開墾があり、地名がつけられたものと思わ

図１　周辺遺跡分布図

0　200m

れる。今回の発掘成果では、古墳時代後期の集落以外に中世の耕作に関わる遺構群が数多く見つかった。その開発年代は明瞭ではないものの、平安時代後期の黒色土器や鎌倉時代前期の瓦器椀が見つかっており、注目できる。このころに上垣内の地名が成立した可能性を指摘しておきたい。

第２節　調査経緯

都市計画道路梅が丘高柳線が寝屋川市域を縦貫することとなり、本府教育委員会で平成25年に試掘調査を実施した。道路計画地周辺ではこれまでに発掘調査があまり行われていなかったものの、遺物の確認できる試掘調査区もあった。これをうけて、平成26年に遺物が確認された調査区周辺を再度試掘調査した結果、遺構・遺物が発見されたため、上垣内遺跡の範囲を拡大し、約450㎡の本調査を実施した。その結果、古墳時代後期の竪穴住居・中世の溝や土坑などが発見された。遺構はさらに東西の未調査地に広がる可能性が高いことが分かった。

今回、遺構の広がりなどを確認すべく、平成26年度調査区の西側と北側に接して二つの調査区を設定し、発掘調査を実施することとなった。南側を27－Ａ区、北側を27－Ｂ区とした。27－Ａ区では26年度調査で検出された古墳時代後期の竪穴住居の続きの部分、掘立柱建物の全容などが判明した。ところが、27－Ｂ区は大半が戦後の削平などで削られており、良好な遺構は残されていなかった（図２・図３）。

今回の現地調査（平成27年度）は平成27年４月１日より実施し、７月10日に終了した。遺物整理作業と本書の作成は現地調査と併行して開始し、平成28年12月末に終了した。今回調査区のすぐ東側の道路計画地は大きな谷になっており、遺構・遺物は発見されないが、谷を挟んでその東側の道路計画地は、平成26年度に確認調査を実施し、遺構・遺物が発見されているため、その発掘調査について協議中である。

第３節　調査方法

大阪府教育委員会・大阪府文化財センターの発掘調査は調査区の位置を共通して表現できるよう、大阪府発行1/10000地形図を基準として４段階の区分による地区割を実施している（図３）。第Ⅰ区画は南西隅を基準として縦軸をＡ～Ｏ、横軸を０～８に区画する。上垣内遺跡は寝屋川市の南端に位置するＩ６区内にある。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画の南西隅を基準として16等分したもので縦1500ｍ、横2000ｍの範囲である。今回調査地は16区にあたる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を100ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸を１～20、横軸をＡ～Ｏに区分したものである。今回調査地は６Ｄ区・６Ｅ区内にある。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画を10ｍ方眼で区画し、北東隅を基準として縦軸をａ～ｊ、横軸を１～10に区分したものである。今回調査区の北端はＩ６－16－６Ｄ－４i、南端はＩ６－16－６Ｅ－２dである。

本文中の北は座標北を示す。水準は東京湾平均海水面（Ｔ．Ｐ．）を使用した。遺構面の標高は最も高いところで30.8ｍ前後、最も低いところで27.8ｍ前後である。調査地は、手測量で1/50の遺構図・等高線図を作成した。発掘調査は地表面の宅地盛土と旧耕作土を重機で除去し、水田床土を人力掘削、地山面で遺構検出した。各調査区の地山は大半が地山面を深く切り土し、ひな壇造成されていた。

出土遺物の総量は少なく、遺存状況もよくない。コンテナ５箱の土師器・土師質土器・瓦質土器など、在地の土器類が大半である。その他、中世の中国製磁器と、サヌカイト原石や打製石器が出土している。

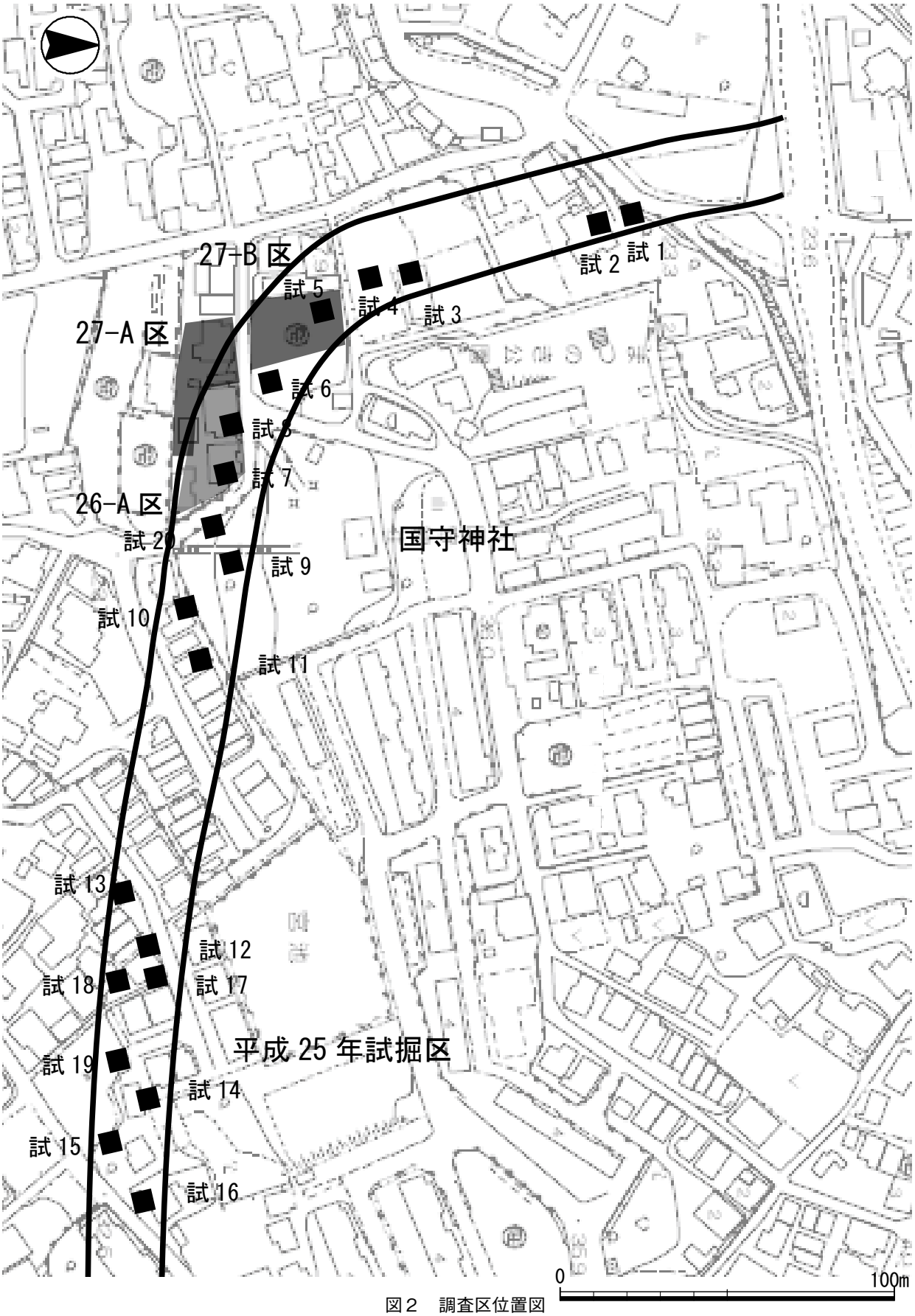

27-B 区
27-A 区
26-A 区
国守神社
平成 25 年試掘区
試 1
試 2
試 3
試 4
試 5
試 6
試 7
試 8
試 9
試 10
試 11
試 12
試 13
試 14
試 15
試 16
試 17
試 18
試 19
試 20
0
100m

図２　調査区位置図

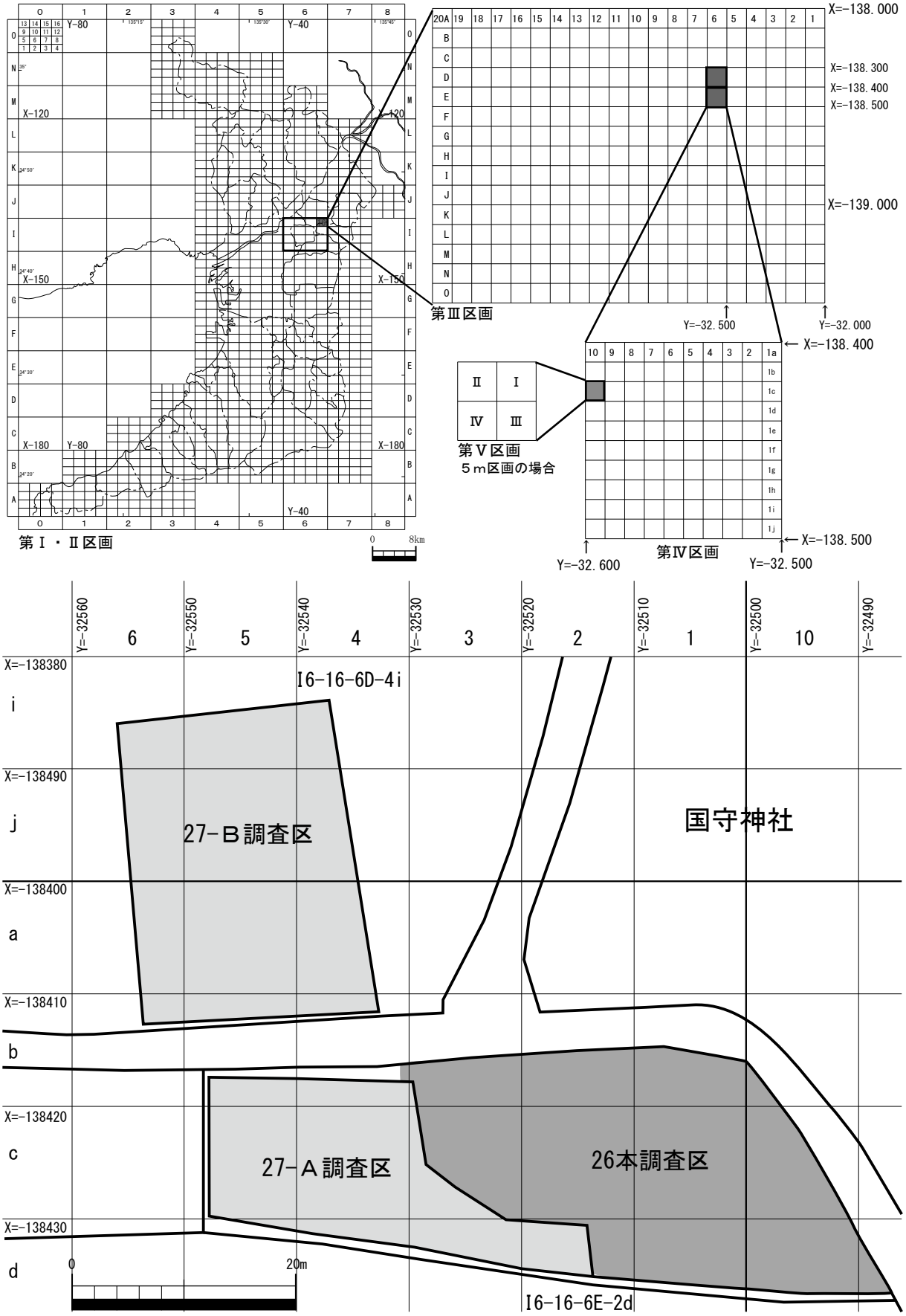

第Ⅰ・Ⅱ区画
第Ⅲ区画
第Ⅳ区画
第Ⅴ区画
５ｍ区画の場合
X=-138.000
X=-138.300
X=-138.400
X=-138.500
X=-139.000
Y=-32.500
Y=-32.000
Y=-32.600
Y=-32.500
I6-16-6D-4i
I6-16-6E-2d
27-Ｂ調査区
27-Ａ調査区
26本調査区
国守神社
20m

図３　調査区地区割図

出土遺物は現地調査と併行して洗浄・注記・実測・復元などをおこなった。その後、出土遺物の写真撮影委託を実施した。

また、本書を刊行するにあたり、遺構・遺物図面の浄書をデジタル図化し、省力化をはかった。アドビシステムのイラストレータＣＳ４による。

第４節　層序

戦後間もなくの航空写真を観察すると、上垣内遺跡のある丘陵はひな壇造成による水田が広がっていた。今回調査区もその後の住宅盛土などを除去すると、深さ約0.2ｍの水田耕作土があり、その下に遺物を包含する水田床土がみられた。その直下が地山である。水田は永年の耕作によって、徐々に小規模な区画が統合されていったようで、水田床土が２、３層に分けられる部分もある。

地山は花崗岩や安山岩などの礫や砂利を含む黄褐色の粘質土で、洪積段丘の上面にあたる。試掘調査を含むこれまでの調査で、この中から旧石器時代の遺物などは確認されていない。

これまでの調査で、遺構は地山に掘削されたものを検出した。したがって、古い遺構の上面は永年の耕作で削平の激しいところが多い。水田床土に含まれる須恵器・土師器などの古代の遺物も、中世以降の開墾で粉砕されたものが多く、磨滅が激しく、遺存状況は悪い。また、古墳時代の土器片と中～近世の土器片が混在して発見された。大半の遺物は二次堆積で、遺構に伴う遺物はわずかだった。

基本層序は、住宅盛土下の表土・水田耕土が黒褐土、遺物包含層である水田床土が淡灰粗砂・暗褐土・淡灰土・灰褐土など、地山が礫混じりの黄褐粘土や茶褐粘土である。試掘調査と前年の平成26年度の本調査によって、土層の堆積状況は検討されていたので、層序はそれに倣った。報告書を参照されたい。

27－Ａ・Ｂ区とも第１層の盛り土を除去すると、第２層の水田耕土が部分的に残る。第２層は5YR2/1黒褐色である。地山は第８層、10YR7/8黄橙色に対応する。遺物包含層である第３～第７層の旧水田床土は10YR6/1・10YR4/1などの淡灰色・褐灰色である(図４)。

地山は概して北が高く、南が低い。さらに、調査区の南は深い谷となる。ひな壇状の水田は緩やかに傾斜する斜面地の北側を削って南側に客土し、平坦面をつくりだす。したがって、地山を削った部分は、包含層がなく、遺構も削平されている。逆に、客土された部分は遺構が残され、遺物包含層が0.3～0.8ｍ程度ある。

遺物包含層である水田床土はいくつかに分層でき、層境で遺構面の有無を確かめながら人力掘削したが、層境に顕著な遺構はなかった。

第Ⅱ章　調査成果

第１節　27－Ａ区の調査

27－Ａ区は平成26年度本調査区の西に接する約260㎡である。平成26年度本調査区は、大きく二面の遺構面を確認している。第１面は旧耕土の下層からみつかった面で、主に東西方向の中世耕作溝が多数検出されている。第２面は地山面で、地山に切り込まれた遺構群である。主に古墳時代後期の竪穴住居(竪穴建物)などと、中世以前の遺物が発見されている。今回の調査でも、前回調査に準拠した二つの遺構面を確認している。ただし、第１面に対応する遺構群はところによってその前後の層から切り込まれたものもあり、調査区全体が明快に面をなさなかった。したがって、第１面対応の面を上層遺構とする。さらに、その下の層から発見された遺構、地山に切り込まれた遺構群を下層遺構として報告する。

上層の遺構(図版２)

27－Ａ区は戦後宅地化されていた。建物の基礎を除去すると、宅地化前の水田耕作を示す旧耕土と床土があった。床土は分層でき、二層の床土を除去すると、主に東西方向の細長い溝群が検出された。

溝は長いもので長さ10ｍをこえ、幅はおおよそ0.3ｍ前後、深さは0.1ｍ前後である。これらの溝は上層の水田床土(褐灰土)によって埋められており、遺物はほとんど見られない。今回の調査では瓦器小片が、平成26年度本調査区では土師器小片が発見されている。水田耕作か、その裏作にともなう畝溝と考えられる。溝は場所によって重なりもみられ、長年にわたって形成されたものと考える。中世から近世にかけて形成されたものだろう。したがって、調査区周辺は中世段階の開発でひな壇造成され耕地化したと考える。

27－Ａ区の北側で浅い落ち込み状遺構が確認された。東西12ｍ以上を測る。西側は調査区外へと延びる。東端は南に約５ｍおれる。深さは深いところでも0.2ｍ程度で、上面の褐灰土に覆われる。遺物はみつかっていない。水田耕作に伴う整地土かもしれない。この落ち込み状遺構の上面からも耕作溝と思われる東西溝が確認されている。

下層の遺構(図４～図10・図版３～10)

27－Ａ区は平成26年度本調査区と東側・南側を一部重複して調査し、前回全容を明らかにできなかった遺構についての解明につとめた。調査区の北側は中世の水田開発などで地山が削平を受けていた。さらに、戦後の宅地化によって、一部はコンクリート基礎が地山深くまで削る部分もあった。

27－Ａ区からは竪穴住居三棟、掘立柱建物一棟、落ち込み一基などを確認した。このうち、竪穴住居二棟、掘立柱建物一棟は平成26年度本調査区で一部が検出、『上垣内遺跡』に報告されている。

竪穴住居Ａ－１は調査区の北西で発見された東西1.8ｍ、南北1.1ｍ以上、深さ0.2ｍを測り、主軸を南北の方位にあわせた隅丸方形の浅い遺構である(図５・図版10)。南側は削平がひどく、住居の限りや立ち上がりが明瞭でない。北側と東西に幅約0.2ｍ、深さ0.1ｍの浅い壁溝がめぐる。覆土は黄橙色粘土の一層である。カマド痕跡や主柱穴は明瞭でなく、建物ではない可能性もある。ただし、建物内部から須恵器小片が発見されており、竪穴住居Ａ－２・Ａ－３と共通する時期と考え、竪穴住居とした。

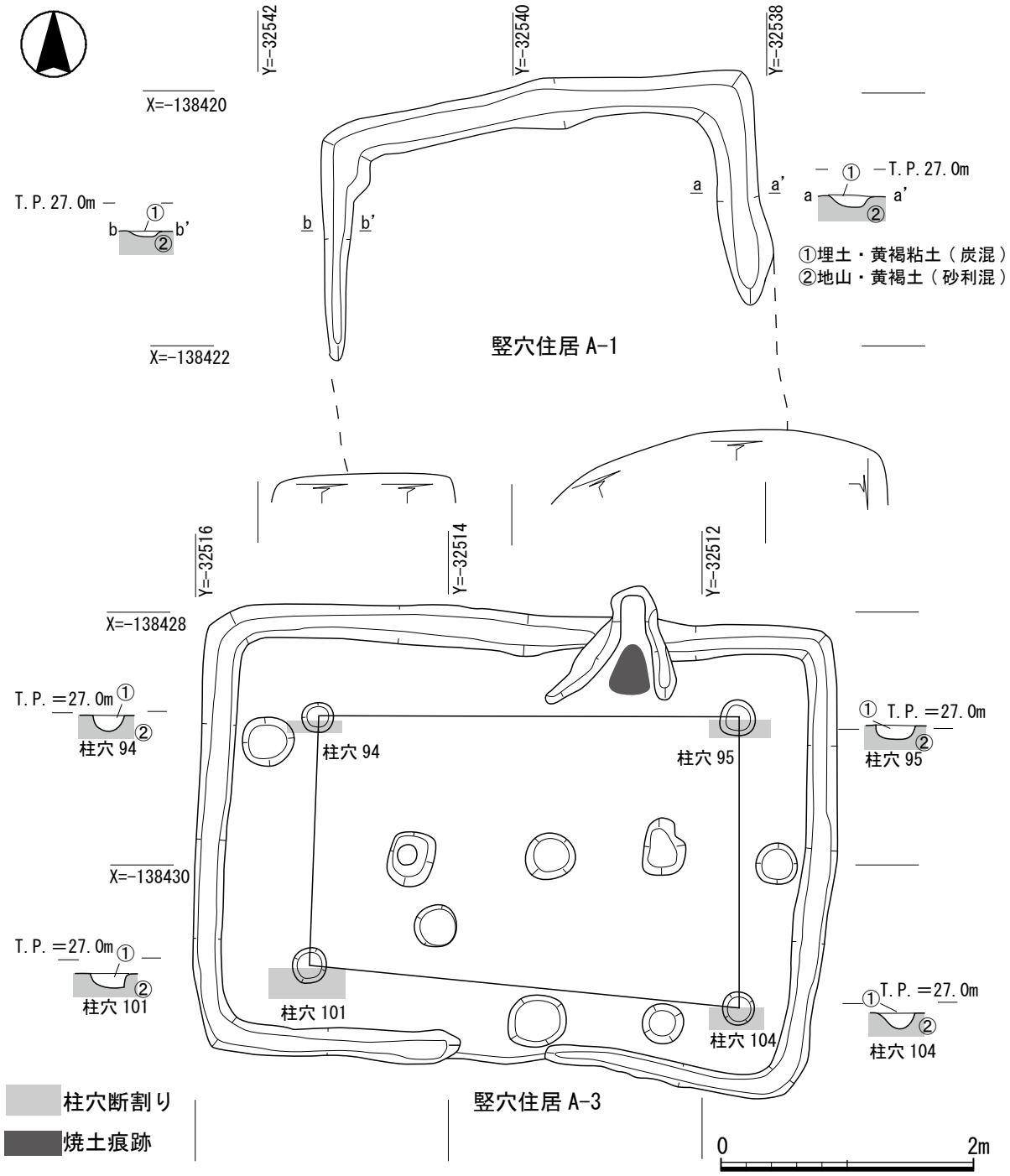


図５　竪穴住居 A-1・竪穴住居 A-３平面図

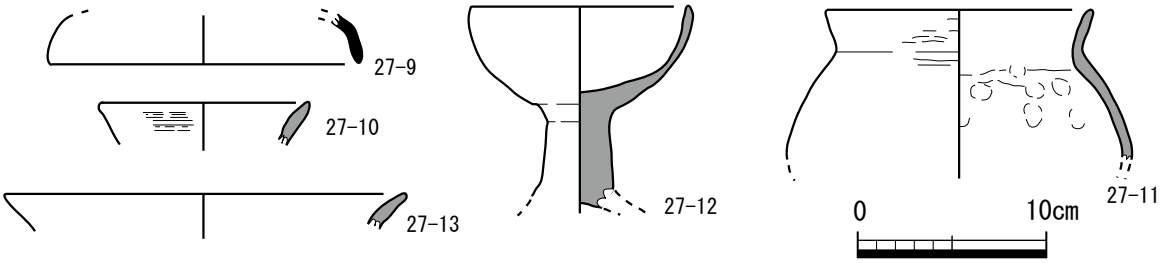


図６　竪穴住居Ａ－３出土土器

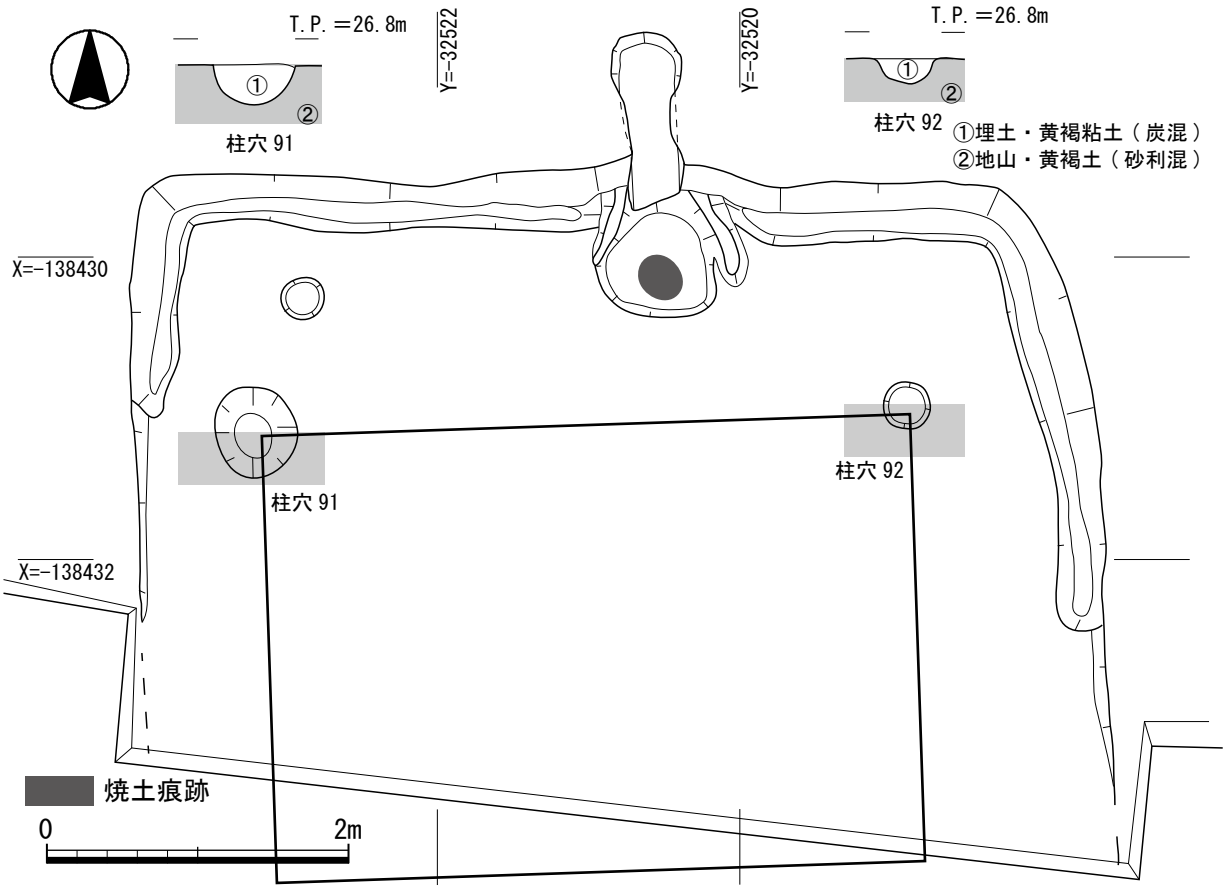
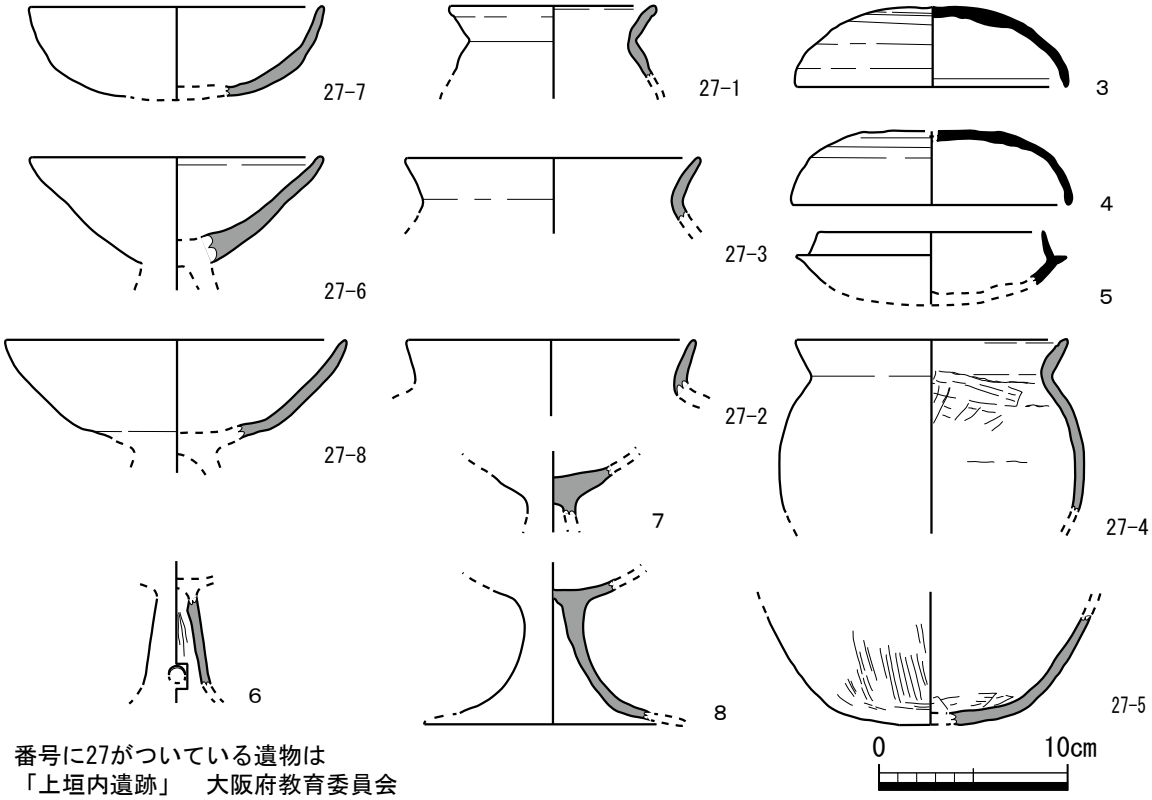


図７　竪穴住居Ａ－２　平面図



番号に27がついている遺物は
「上垣内遺跡」　大阪府教育委員会
平成27年11月で報告したもの

図８　竪穴住居Ａ－２　出土土器

竪穴住居Ａ－２は調査区の南東で発見された(図７・図版８)。東西6.4ｍ、南北3.2ｍ以上、深さ0.25ｍを測る。主軸を南北の方位にあわせた隅丸方形の浅い遺構である。南側は削平され、住居の限りや立ち上がりを確認することはできなかった。北側と東西に幅約0.4ｍ、深さ0.1ｍの浅い壁溝がめぐる。北側中央にカマド痕跡と焼土が残る。カマドからは住居の北側に煙道がある。カマド燃焼室は床面から約0.15ｍ低くなり、よく焼けている。その東西にハ字形に粘土壁があり、カマド痕跡と考える。カマドは平成26年度本調査区によって検出・報告されており（竪穴住居跡88)、詳細はこの報告に譲る。カマド燃焼室には土師器甕底部と高杯坏部の破片が残されていた。煙道部分は幅0.3ｍ～0.4ｍ、深さ0.2ｍを測り、炭が残り、天井部の粘土が落ち込んでいた。

住居内の覆土は黄橙色粘土の一層で、炭化物が混ざる。北側の主柱穴二つは直径0.3ｍ前後、深さ0.1ｍ以上を測るものの、南側は明瞭でなく、本来は四本柱であったと思われる。遺構は調査区外に伸びるものの、調査区のすぐ南側は現在崖面になっており、旧地形は改変されている。

建物内部から須恵器蓋坏・土師器甕・椀・高杯が発見されており､六世紀後半頃に廃絶したと考える。このうち、今回調査で発見した遺物は須恵器蓋杯三点と高杯三点である(図８・図版13)。

竪穴住居Ａ－３は調査区の南東隅で発見された東西5.0ｍ、南北3.5ｍ以上、深さ0.1ｍを測る(図５・図版７)。主軸を南北の方位にあわせた隅丸方形の遺構である。平成26年度本調査区によって検出・報告されており（竪穴住居跡84)、詳細はこの報告に譲る。今回は住居の南側の状況を確認した。住居の南側は約３ｍまで平坦面が続き、その南は崖面になっている。平坦面で遺構・遺物は確認されなかった。竪穴住居Ａ－３は四周に幅約0.2ｍ、深さ0.1ｍの浅い壁溝がめぐる。南側中央に壁溝の途切れる部分があり、この部分が出入り口と考える。

北側中央やや東よりにはカマド痕跡と焼土が残る。カマドから住居の外に煙道がのびる。カマド燃焼室は床面とほぼ同じ高さで、よく焼ける。その東西にハ字形に粘土壁があり、カマド痕跡と考える。カマド燃焼室には高杯脚部の破片が残されており、カマドに甕などを据えた際の支脚とされる。煙道部分は住居の外側0.3ｍのところが残り、幅0.3ｍ～0.4ｍ、深さ0.2ｍを測る。煙道の覆土には炭と天井を形成する粘土を含む。

住居は東西が長く南北が短い。主柱穴は壁に沿って四本発見され、直径0.2ｍ前後、深さ0.1ｍ以上を測る。その他、柱穴状のものがいくつか確認されている。建物内部から須恵器蓋・土師器甕・壺・高杯が発見されており、竪穴住居Ａ－２同様、六世紀後半頃に廃絶したと考える(図６)。

掘立柱建物Ａ－１は調査区中央の南側で発見された５×３間の東西棟である(図９・図版９)。平成26年度本調査区で建物の北東隅が確認され（掘立柱建物)、今回の調査で全容が調査された。柱穴はいずれも隅丸方形で一辺0.7ｍ程度、深さは0.3ｍ～1.2ｍである。検出面は北西が高く、南東が低い。高低差は0.5ｍ以上を測る。南側の柱穴群が浅く、北側の柱穴群が深く残されているわけではなく、もともとの居住面は南に傾斜していた可能性が高い。柱穴の埋め土から六世紀後半の杯身(11)が、建物の上面から七世紀後半の蓋杯(９・10)が発見されている（図13)。前者は竪穴住居群に伴う可能性が高い。後者はこの建物の廃絶時期を示唆するもので、竪穴住居がなくなった七世紀後半以降に掘立柱建物がつくられたと考える。

落ち込みＡ－１は調査区の南西隅で発見された不定形で浅い土坑状の遺構である(図４・図版10)。南

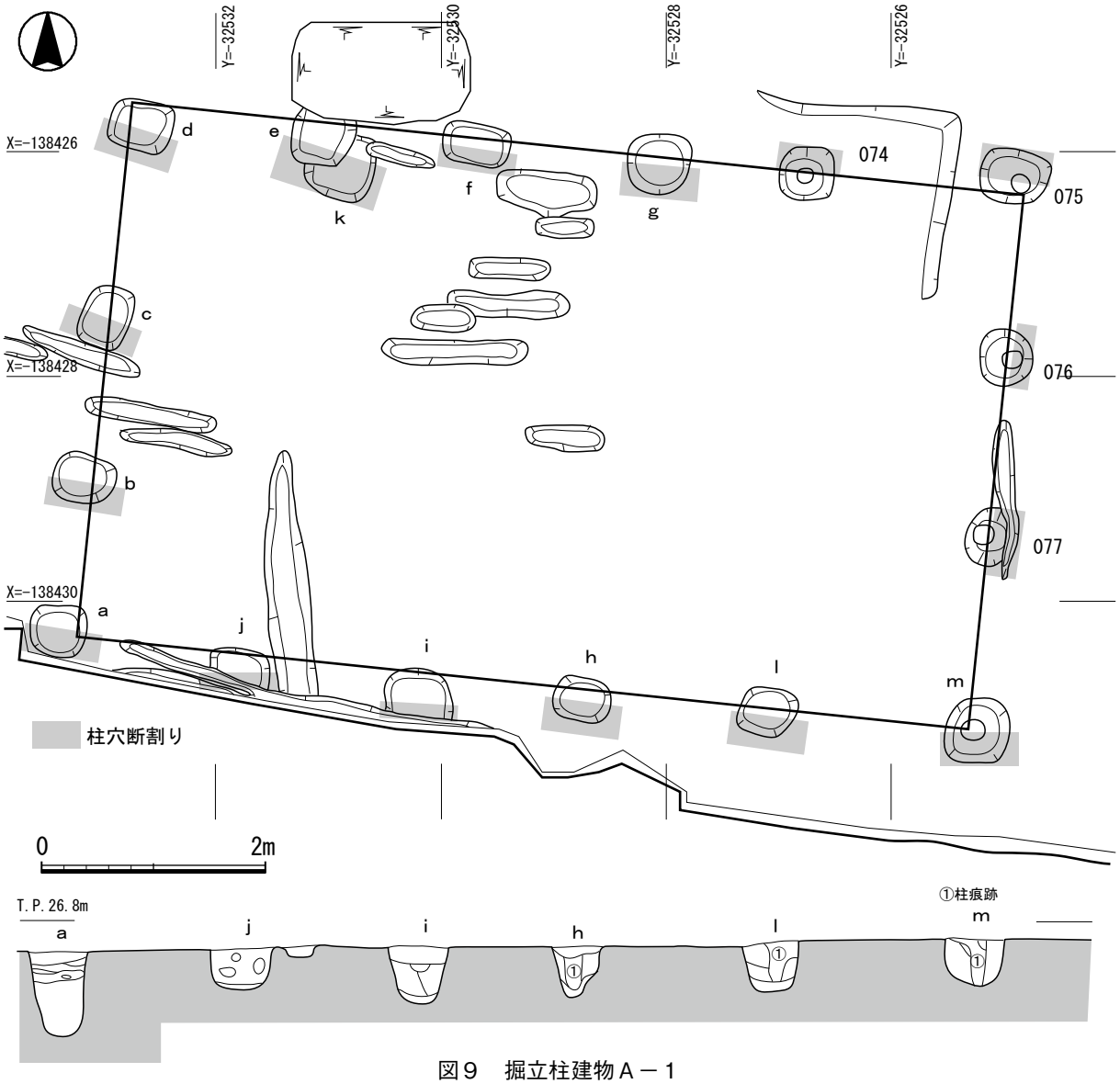


図９　掘立柱建物Ａ－１

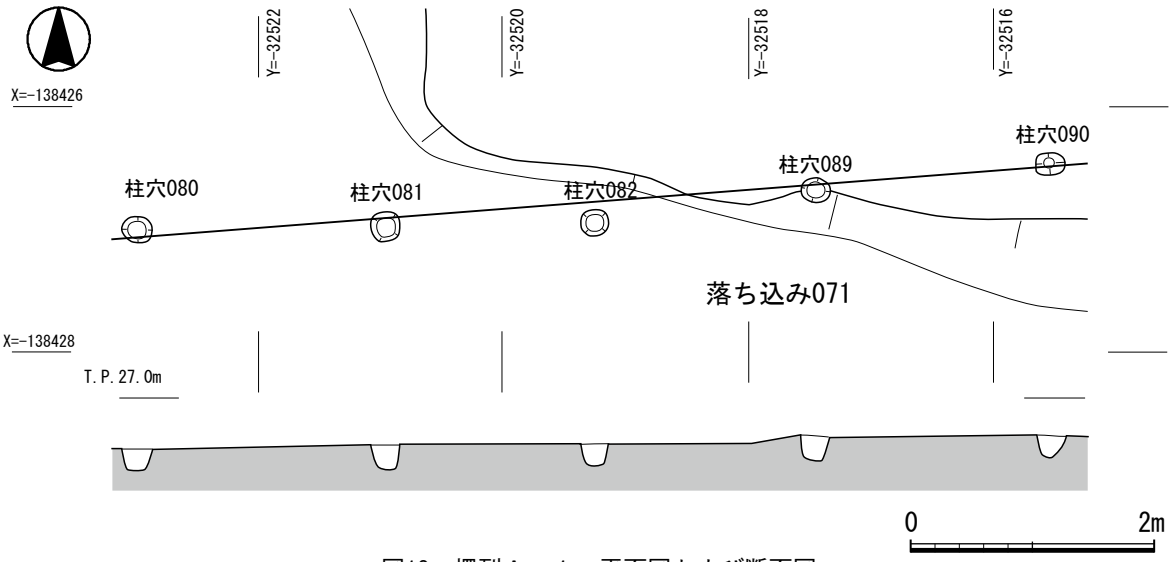


図10　柵列Ａ－１　平面図および断面図

側は調査区外へと続く。現状、東西4.4ｍ、南北4.1ｍ、深さ0.4ｍ～0.1ｍを測る。底は平坦ではなく、凹凸が激しい。埋め土は一層で炭混じりの灰褐粘土による。土師器や須恵器の破片が多く含まれていた。火災による廃棄物などを窪地に捨てて整地したような様相である。七世紀後半の土師器甕・須恵器蓋坏・壺・甕(12～34)などとともに黒色土器Ａ類(35)が見つかった（図13)。

その他、竪穴住居Ａ－２の北側に柵列Ａ－１がある。前回調査の柱列１の報告に譲る(図10)。

第２節　27－Ｂ区の調査

27－Ｂ区は市道を挟んで27－Ａ区の北側に位置する(図11・図版11・12)。北側に高く、南に緩やかに降る。生駒山地から東西に延びる丘陵縁辺の頂部に位置する。調査は北側と南側に分けて、排出土を仮置きして実施した。まず、北半分について、機械掘削すると、戦後の建物基礎や撹乱穴（ゴミ穴）があり、その隙間に地山の黄白粘土が露出した。建物以前の水田耕作などの痕跡は削平により残されていなかった。また、地山に切り込まれた遺構もなく、遺物も見つからなかった。地山の深いところまで削られている可能性が高い。

調査区南側についても数多くの建物基礎や撹乱穴（ゴミ穴）がみられた。これらを除去すると、調査区の南端で水田床土と思われる黄橙粘土がみられた。これを人力掘削で除去をすると、地山の黄白粘土があらわれ、南西隅を中心に土坑・小穴群・南北溝などが見つかった。

土坑・小穴群の大半は茶褐粘土で覆われていた。わずかに土師器小片を含む小穴もあったが、遺構の性格・年代を解明することはできなかった。いくつかの小穴は切り合い関係も認められた。

なお、近隣からの聞き取りによって、戦前はこの地に診療所施設があり、敷地の中央に庭園と噴水のある小池もあったとされる。今回調査の機械掘削時、多数の医療関係資料（薬瓶など）が埋め捨てられていた土坑があり、これらを裏付ける。また、小池と噴水の台座と思われるモルタルで覆われた方形土坑、噴水の装飾に使われたモルタルの女神像などの破片も確認した。

撹乱穴（ゴミ穴）はこれらの施設で使われた生活ごみを焼いて埋めた土坑と思われ、戦前から戦中の資料が含まれていた。機械掘削で除去する間に、年代の確認できるもののみサンプルとして取り上げた(図14・図版16)。

第３節　出土遺物

発見された遺物はコンテナ６箱である。土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・輸入陶器・陶器・陶磁器・ガラス瓶などである。その他、打製石器・鉄製品がある。打製石器・鉄製品は遺構に伴うものではない。土器や陶磁器なども、遺構からの出土が少なく、小破片が多い。今回調査で図化できたものは55点である(表参照)。

27－Ａ区からは、おもに古墳時代後期と中世の遺物が出土した。27－Ｂ区では、近世以前の資料は見つからなかった。撹乱穴などに近・現代の生活ごみが多数あり、年代を確認できる資料をいくつか確認したので報告する。これらの近・現代の遺物は機械掘削時にサンプル的に取り上げたものである。

打製石器にはサヌカイト製のナイフ形石器と石鏃がある(図12・図版13)。ナイフ形石器は頂部を欠損し、現存長2.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cmを測る（１)。片面は丁寧に打面調整されて形態を作り

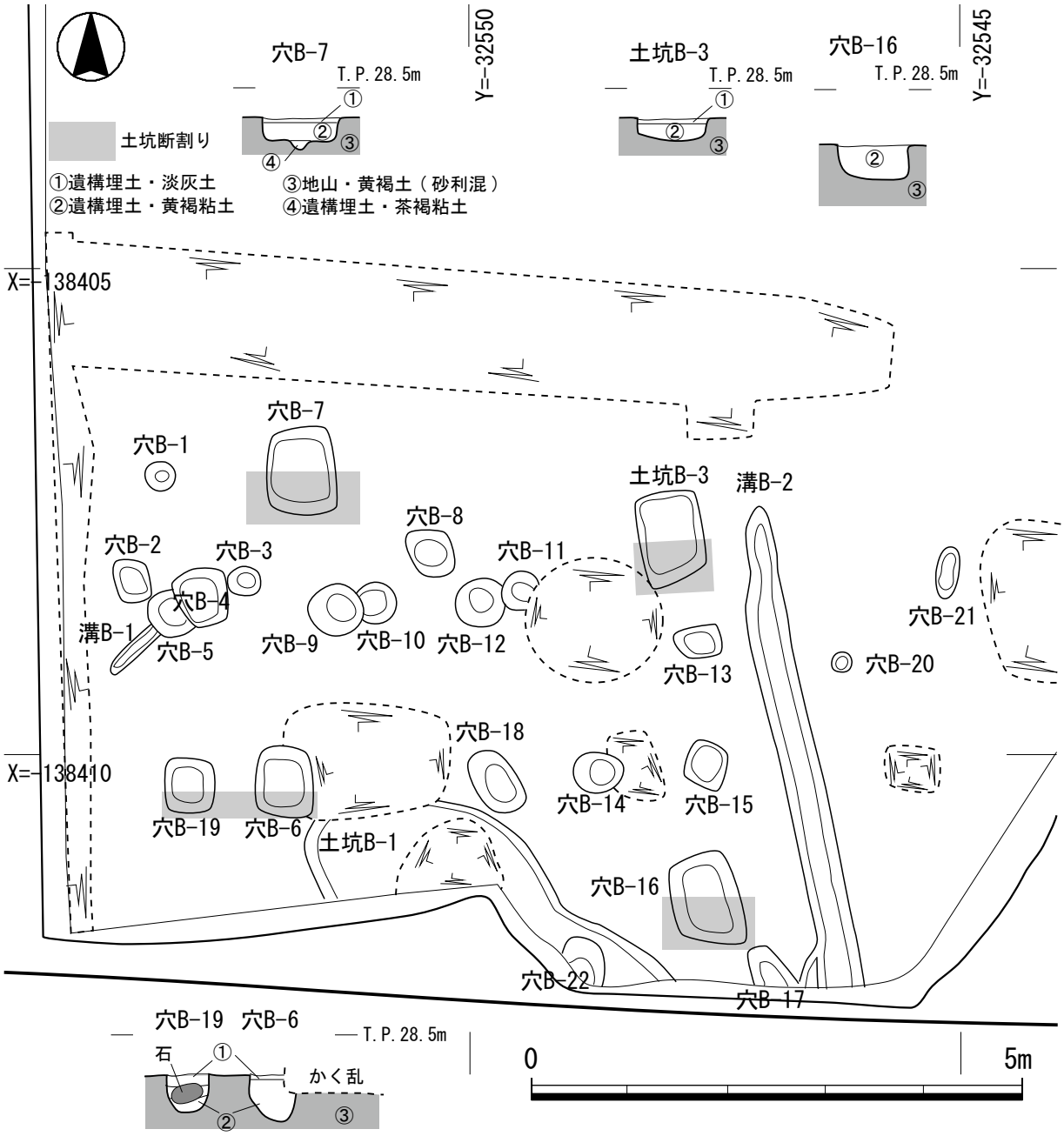


図11　27－Ｂ区南端の遺構

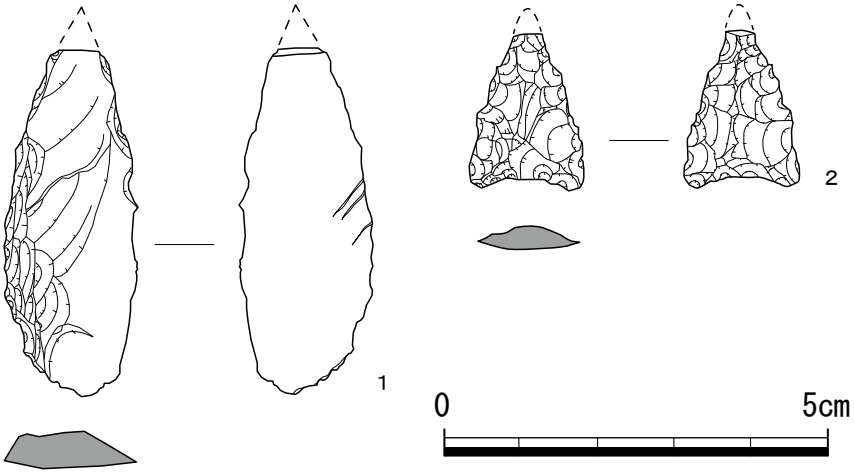


図12　打製石器（等倍）

だし、もう片面は一面の剥離面である。剥片石器の可能性もある。打製石鏃は、現存長2.1cm、最大幅1.5cm、最大厚0.3cmで、頂部を欠損する。基部はわずかに凹形を呈し、両辺は直線にならず、中央付近でやや折れる。縄紋時代後期のものと考える。27－Ａ区第２面の地山直上から出土した（２）。

竪穴住居Ａ－２からは土師器高杯と須恵器蓋杯が新たに発見された(図８・図版13)。土師器高杯はいずれも脚部内側の中空部に円盤充填がみられない（６～８）。内面にわずかにシボリ痕が残る。円形のスカシ孔を２孔穿つものもある（６）。

須恵器坏は蓋と身がある（３～５・11)。３～５は竪穴住居Ａ－２の覆土、11は掘立柱建物Ａ－１の柱穴掘方から発見された。３は復元口径14.2cm、器高4.2cmを測る。口縁部の焼け歪みが大きい。４は復元口径14.6cm、器高3.9cmを測る。断面は黒色の芯があり、陶邑産と推定する。天井部との境にはヘラのアタリキズによる捲れ痕がある。５・11は坏身である。５は復元口径12.0cm、残存高2.8cmを測る。焼成は堅緻で、外面の表面調整は粗い。受け部に重ね焼きの痕跡がみられる。11は復元口径12.0cm、復元受部径14.8cm、残存高3.0cmを測る。立ち上がりは緩やかに内傾し、先端を丸く仕上げる。断面の色調は灰赤色で二次焼成時の還元がうまくいかなかったことがうかがえる。いずれも六世紀後半のＴＫ43段階ものと考える。

飛鳥時代の須恵器蓋坏には杯Ｂと杯Ｈと杯Ｇがある(図13・図版14)。坏Ｈは身に短い返りがある小片で口径10cm程度である。(10)。飛鳥Ⅱ～Ⅲ期と思われる。杯Ｇの蓋は内面に短い返りをもち、口径が10cm程度となる（９）。杯Ｇの蓋と杯Ｈの身は掘立柱建物柱Ａ－１に伴うと考える。

杯Ｂの蓋は外面端部に短いかえりを持つ(19～22)。口縁端部を下方に折り曲げ、尖り気味に丸く仕上げる。20は復元口径11.6cm、21は復元口径13.0cm、22は復元口径15.0cmを測る。坏Ｂの蓋のツマミは扁平で貼り付けによる (19)。杯Ｂの身は斜めに直線的に立ち上がり、高台径5.8cmを測る (25)。杯Ｇの身は復元口径10.4cm、復元底径6.2cm、器高4.1cmを測る(23)。杯Ｂと杯Ｇの身は地山直上の灰褐土層や落ち込みＡ－１から発見された。いずれも飛鳥Ⅴ期かそれ以降と思われる。

須恵器にはその他、壺・甕がある(図13・図版14)。いずれも小片で、地山直上の灰褐土層と落ち込みＡ－１から発見された。壺は高台をもつものとないものがある (26～29)。甕は口縁部の小片と、肩部の小片がある (30～34)。口縁部は端部をつまみ上げ、ラッパ状に短く開く形態で、概して器厚が大きい。肩部はやや張り気味で、ヘラ記号をもつものがある (32)。

土師器はいずれも落ち込みＡ－１から発見された(図13・図版15)。甕小片は口径はよくわからない(12～14)。口縁部の小片は強く屈曲し、端部を内側に折り返す(12・13)。長胴甕の一部と考える。球形の甕になる思われる口縁部はく字形に屈曲し、端部をつまみ上げる (14)。屈曲部に段があるものは型作りの痕跡かと思われる(15)。甕の把手は断面が円錐形のものと、板状のものがある (16～18)。断面が円錐形のもの牛角状で、体部に挿入して接合する (16)。断面が板状のものは形状が扁平で三角形、貼り付けて接合する (17・18)。

黒色土器Ａ類の碗は復元口径15.0cm底部径8.0cmを測る (35)。磨滅が著しく調整は不明であるが、器壁が薄く、浅く開くタイプである。落ち込みＡ－１の出土である(図13・図版15)。この他、黒色土器は細片のため図化できなかったが、Ｂ類も出土している。落ち込みＡ－１出土遺物の下限となるものであるが、長期にわたって形成された廃棄土坑と考えるより、廃絶後、あるいは中世の耕作に伴う混入の

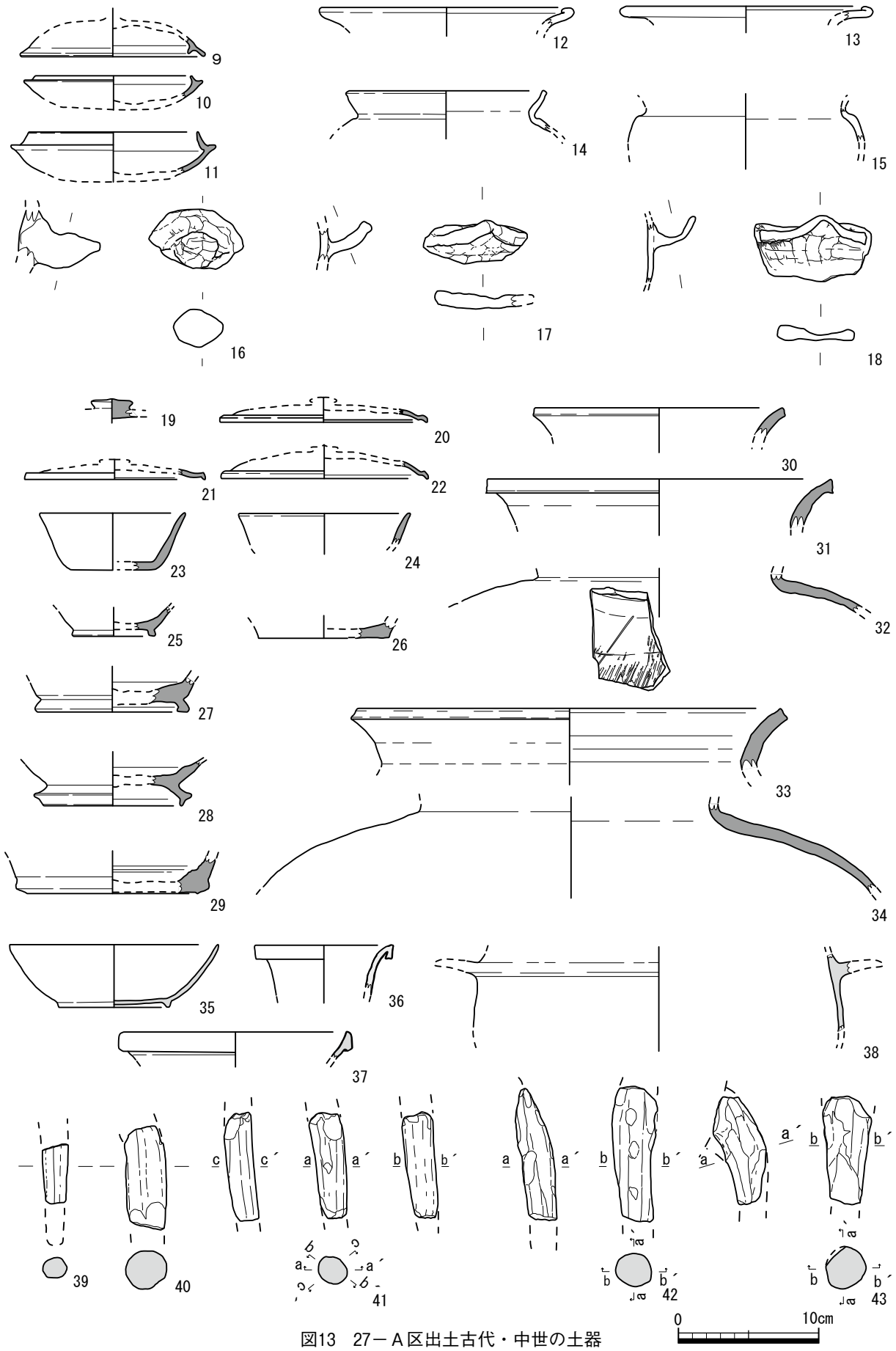


図13　27－Ａ区出土古代・中世の土器

可能性もある。その他、鉄針か釣針と考えられる小型の鉄製品も落ち込みＡ－１から出土している。

中世の遺物は大半が水田床土などの遺物包含層から出土した（36～43)(図13・図版15)。

輸入磁器には白磁碗と青磁壺がある。白磁椀は口縁部を折り返して玉縁状に丸く仕上げ、口縁部外面に段を有す（37)。平安時代末期の日宋貿易でもたらされた中国福建省の閩南(びんなん)沿海窯系、12世紀末頃のものだろう。小破片のため明瞭ではないが、復元口径は16.0cm程度であろう。

青磁壺は口縁部の小片で復元口径は10.0cmを測る（36)。釉厚は0.2～１mm程度で青白色、鎌倉時代の交易によってもたらされた中国江西省の龍泉窯系、13世紀前半以降のものと考える。なお、平成26年度本調査区では鎌倉時代後期の鎬連弁紋の青磁椀や、室町時代に降る連弁紋をもつ青磁椀などの輸入陶磁が発見されている。

瓦質土器には羽釜がある（38～43)。羽釜の胴部は、内面を横方向のハケメ、外面をヘラ削り刷りする（38)。三足羽釜は脚部のみの出土である。磨滅が激しく、ナデた稜線が面取り状に残る（39～43)。その他、瓦質の土製円盤があり径3.5cmを測る(44)。羽釜か甕の体部を転用したものだろう。打ち欠いた断面を丁寧に研磨し、滑らかにする。転用された時期はわからない。

中世の遺物にはこの他、土師器・瓦器・陶器(45)がある。すべて小片で、大半が27－Ａ区の遺物包含層から発見された(図版15)。

近世の遺物は、機械掘削土層や黄灰色土層から少量発見されている。波佐見焼の茶碗や鉢の小片、陶器碗の小片がある。

近代の遺物は陶磁器、ガラス容器などコンテナ２箱ある。大半は27－Ｂ区の機械掘削時に撹乱坑内から発見された。膨大な量があり、掘削途中に選択的に取り上げた(図14・図版16)。

磁器は瀬戸美濃焼が大半である（51～55)。昭和15年の国家統制のもとに作られた統制磁器には、統制番号が記されている。外面に緑色２本の圏線が巡り、国民食器と呼ばれた茶碗には大型と小型がある(51～53)。後者は湯呑の代用かもしれない。口径8.4cmを測り、高台内に統制番号「岐453」が陰刻されている（51)。この番号は土岐津市陶磁器工業組合に所属した成瀬金太郎（成林寺）の製品に付されたものである。大型の茶碗には口径11.2cmを測る完形品がある(53)。もう一つは口径14.2cmを測る(52)。統制番号はない。コバルト釉で草花紋をプリントした碗は口径11.2cmを測り、高台内に統制番号「岐101」が陽刻されている（54)。西南部陶磁器工業組合に所属した各務甚三郎（笠原町）の製品に付されたものである。八角形の皿は長辺12.9cm、短辺16.8cmを測る。型作りにより成形され、高台も八角形に作られている。内面に山水画風の風景画、高台内に統制番号「瀬624」がコバルト釉でプリントされている。瀬戸焼の陶磁器工業組合に所属する窯元のものである（55)。

陶器の化粧品容器も各種見つかっている（46～48)。口径4.7cm、器高3.9cmを測る小型品は、内面に透明釉がかかり、外面および高台内は無釉である。高台内に統制番号「岐682」が陽刻されている（46)。妻木陶磁器工業組合に所属した仙石周太郎（妻木町）の製品に付されたものである。この容器には「サンスキン　洗顔クリーム」の紙ラベルが張られていたことが類品より知られる。戦前のベースメークは、無脂肪性のクリームを塗った上に粉白粉をはたくという肌への負担が軽いものだった。それが戦後、多くの女性たちが社会に出るようになると“より手間がかからず長持ちするベースメーク”がニーズとなり、洗顔クリームも進化していく。昭和23年、日本で初めて油性のクリームファンデーションが発売さ

れ、昭和25年にはスティックタイプの油性ファンデーションが大ヒットすると、ファンデーションが広く普及する。油性ファンデーションを使うと、従来の石鹸や洗い粉だけの洗顔ではすっきりと落ちたとはいえず、そこで、ファンデーションを落とすクレンジングクリームが登場。メークによくなじませふき取った後、さらに石鹸で洗うという洗顔ステップがはじまった。本品は昭和20年代のものと思われる。

スクリュー栓のある容器は口径3.9cm、器高5.65cmを測る完形品である(48)。全体に透明釉がかかる。反時計方向に回すと閉まる。

英字をプリントする容器は口径3.6cm、器高4.8cmを測る(47)。胴部は四角形である。コバルト釉で「Ｐ.」と描かれ、パピリオ化粧品にかかわるロゴである。パピリオは伊東胡蝶園（いとうこちょうえん）から改称した日本の化粧品メーカーで、戦後は社名がパピリオとなる。同社が無鉛白粉を国内で初めて開発し、白粉は無鉛がすっかり主流となる。1930年（昭和５年）に有鉛白粉の製造禁止、1934年（昭和９年）に販売禁止となり、無鉛白粉は各社の競争が激化する。このころ洋画家の佐野繁次郎が「パピリオ」のロゴデザインを手がけた。1933年（昭和８年)、「御園つぼみ白粉」を発売、1935年（昭和10年)、「パピリオ白粉」発売、「パピリオ」ブランドがスタートする。本品はこれ以降のものである。

ちなみにパピリオは1974年(昭和49年)に帝人が買収、「株式会社帝人パピリオ」となった。1987年(昭和62年)、アサヒペンが帝人から帝人パピリオを買収、「パピリオ」はアサヒペンの化粧品部門のブランドとなったが、やがて撤退する。1990年（平成２年)、ツムラがアサヒペンからパピリオを買収、「ツムラ化粧品株式会社」を設立するも、1997年（平成９年）にはツムラの化粧品部門も清算され、現在は生産していない。

ガラス製の目薬容器は小型で口径1.2cm、器高4.1cmを測る（49)。型合わせで作られ、コバルト色半透明を呈する。胴部に「目薬　井上水」「京都　井上清七製」と陽刻されている。京都の井上清七薬房の目薬瓶で、井上清七薬房は京都市下京区麩屋町通仏光寺下るにあった薬屋で、近年まで続いていた。江戸時代に梅肉水を目薬にしたり、ハマグリの殻の器に入れた練り薬を紅絹に包んで水でふりだして、目を洗うようにしたことが始まりという。ガラス製の小型化粧品容器「るり羽」は口径1.5cm、器高7.15cmを測る(50)。型合わせで作られ、色は緑色半透明を呈する。口は機械栓の針金を合わせる溝と穴が２か所残る。胴部に「るり羽」「定量」と陽刻されている。大阪の山発産業株式会社の白髪染め「るり羽」(1911年発売）の容器である。山発産業株式会社は1888年にメリヤスの製造会社「山発商店」として創業。戦後はホーユーとともにヘアカラーの老舗メーカーとして、白髪染め「パオン」やシャンプー式ヘアカラー「フェミニン」などを売り出した。1911年に白髪染め「るり羽」を発売。「るり羽」はロングセラー商品となり、瓶や紙ラベルなどの違いにより、型式分けできるという。中島正露丸のガラス容器がある（56)。口径2.4cm、器高7.6cmを測る。型合わせで作られているが、合わせ目が口部と胴部でズレがあり、別作りだったと推定される。色調は茶色半透明、胴部に「中島正露丸」、底部に「大幸製　Ｂ７」と陽刻される。「中島正露丸」は大幸薬品が昭和24年から29年まで使っており、昭和29年に「正露丸」と名称変更された(図版16)。片山正露丸のガラス容器もある（57)。口径1.7cm、器高7.8cmを測る。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は茶色半透明を呈し、底部に「片山」と陽刻される。片山製薬所は大正11年（1922年）創業で、昭和25年11月（1950年）に製薬会社となった。生産工場が現在も枚方にある(図版16)。整腸剤「わかもと」の容器がある（58)。口径2.9cm、器高

11.2cmを測る。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は茶色半透明を呈し、胴部に「Wakamoto」および目盛線が陽刻される。「わかもと」はわかもと製薬が昭和４年から作っており、昭和18年に「わかもと製薬株式会社」となる。ロゴや瓶の形状から戦後間もないころのものと推定する(図版16)。「ヨウモトニック」のガラス容器がある（59)。口径1.7cm、器高16.2cmを測る。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は茶色半透明を呈し、胴部下部に「SANKYO　CO.LTD.」、底部に「○N　21」が陽刻される。「ヨウモトニック」は製造元が三共株式会社、発売元は泰昌製薬株式会社という。三共ヨウモトが大正11年から作っており、ロゴや瓶の形状から大正末年から昭和前期のものと推定される(図版16)。「ホープ」のガラス容器がある（60)。口径5.7cm、器高10.3cmを測る。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は無色透明、胴部に「吉田製薬」、「ホープ　ＮＥＴ375Ｇ」が陽刻される。「ホープ」は吉田製菓の容器で、ロゴや瓶の形状から戦後のものと推定する(図版16)。コーワの容器は口径7.8cm、器高12.1cmを測る（61)。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は茶色半透明、底部に「Kowa」が陽刻され、戦後のものだろう(図版16)。第一製薬の容器は二種類ある。大型は口径6.0cm、器高9.7cmを測る（62)。型合わせで作られ、口はスクリュー式のラグキャップである。色調は淡青色半透明、底部に「DAIICHI　KOGYO　SEIYAKU　KAISYA　LTD」が陽刻される。小型は口径2.6cm、器高7.4cmを測る（63)。型合わせで作られ、口はスクリュー栓で、反時計方向に回すと閉まる。色調は無色透明、底部に「第一　Ｋ１」が陽刻される。いずれも戦後のものだろう(図版16)。

その他、ガラス製の文具糊の小型容器がある。口径3.4cm、器高3.2cmを測る（64)。型合わせで作られ、口は合わせ蓋である。口縁部に注口状のくぼみがあり、指についた糊を拭くことができる。色調は淡緑色透明を呈し、気泡の混入が著しい。このガラス瓶は、「不易糊」の瓶と思われる。「不易糊」は腐らない糊として大阪市南久宝寺町の足立商店で明治28年に開発、命名された。大正13年にアラビア糊「不易ゴム糊」が新開発され、ガラス小瓶で売られているので瓶はこの糊容器と思われる。ちなみに、戦中はアラビアゴムの輸入が困難となり、製造中止となり、昭和25年、「フエキゴム糊」の名で再開し、昭和31年「フエキアラビア糊」と改称されている。ところが、石油化学工業の進展と共に、新しい合成樹脂が続々と誕生し、昭和39年には姿を消した。昭和36年、ガラス瓶・金属蓋・紙ラベルの容器はポリエチレン製ボトルやチューブに変えられたので、それ以前の容器とされる(図版16)。

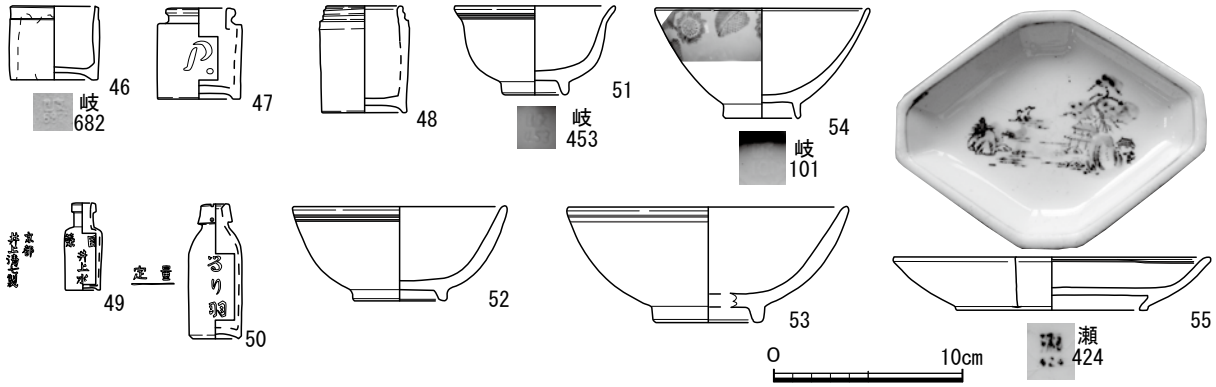


図14　27－Ｂ区出土近現代の遺物

第Ⅲ章　まとめ

今回の調査では上垣内遺跡の土地利用の一端が明らかにされた。今回調査と平成26年度本調査・試掘調査によって、わずかながら旧石器時代の打製石器・縄文時代後期の石鏃などが発見されており、生駒山地西麓でのふるい段階の生業が垣間見られる。いずれも、遺構に伴うものではなく、地山とされる黄褐粘土層のなかからの発見ではない。

次に、顕著な遺構がみつかったのは古墳時代後期の六世紀後半で、三棟の竪穴住居（竪穴建物）が確認されている。集落を形成したものと考えられる。その後の、ひな壇造成で建物の北側や南側は削平を受けており、本来はなだらかな丘陵南斜面を利用して、多くの住居などが形成されていたのかもしれない。

竪穴住居には北側にカマドが取りつく。竪穴住居Ａ－２は北側中央に、竪穴住居Ａ－３は北側中央のやや東寄りにカマドが取りつく。近隣の蔀屋北遺跡は５世紀を中心とした集落遺跡だが、数多くの竪穴住居が見つかっており、もっとも古い住居には北側東端にカマドが取りつくという。そして、時期が降るにつれ、住居の北側中央にカマドを持つようになるという。今回発見のカマドは二棟のみだが、カマドが住居の東側から中央に場所を変えていく変遷過程を物語るものかもしれない。

次に、前回調査までは竪穴住居と掘立柱建物の年代的関連が明快ではなかった。今回、掘立柱建物の上面や付近の包含層から飛鳥時代の土器が散見されるに至り、掘立柱建物は建物廃絶後に形成されたことが確実となった。この間、集落は断絶していたのか定かではない。出土遺物は飛鳥時代Ⅱ・Ⅲ期である。

戦前の伝えによると調査区の東に広がる国守遺跡の周辺から江戸時代に古い骨臓器が発見され、明治になって掘り起こされ、換金されたことが知られる。今回の調査区の集落との関係は定かではないが、飛鳥時代の発展がうかがえる。

その後の遺物として、平安時代後期の黒色土器や鎌倉時代の瓦器椀がみつかっている。ただし、その量は多くなく、顕著な遺構も見られないことから、この時代には水田化されていくものと推定する。

中近世を通して水田化していた上垣内遺跡の27－Ｂ調査区では、明治以降に小学校の校舎が建てられ、のちに診療施設となったという。今回、戦前から戦後にかけてこれらを裏付ける陶磁器やガラス瓶などが多数発見された。

挿図番号	図版番号	実測番号	調査区	出土地区	出土遺構	器　　種	挿図番号	図版番号	実測番号	調査区	出土地区	出土遺構	器　　種
1	13	53	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	ナイフ形石器	33	14	19	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器甕
2	13	1	27-A	I6-16-6E-5c	地山直上	打製石鏃	34	14	51	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器甕
3	13	5	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	須恵器杯蓋	35	15	24	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	黒色土器椀
4	13	6	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	須恵器杯蓋	36	15	37	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	青磁壺
5	13	7	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	須恵器杯身	37	15	38	27-A	I6-16-6E-3d	褐灰土	白磁椀
6	13	3	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	土師器高杯	38	15	36	27-A	I6-16-6E-3d	褐灰土	瓦質土器羽釜
7	13	2	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	土師器高杯	39	15	31	27-A	I6-16-6E-4c	褐灰土	瓦質土器羽釜
8	13	4	27-A	I6-16-6E-3d	竪穴住居A-2	土師器高杯	40	15	35	27-A	I6-16-6E-3d	褐灰土	瓦質土器羽釜
9	14	26	27-A	I6-16-6E-3d	褐灰土	須恵器杯蓋	41	15	34	27-A	I6-16-6E-4c	褐灰土	瓦質土器羽釜
10	14	25	27-A	I6-16-6E-3d	褐灰土	須恵器杯身	42	15	33	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	瓦質土器羽釜
11	14	53	27-A	I6-16-6E-3d	掘立柱建物A-1	須恵器杯身	43	15	32	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	瓦質土器羽釜
12	15	54	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	44	15	49	27-A	I6-16-6E-4b	褐灰土	瓦質土器円盤
13	15	8	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	45	15	50	27-A	I6-16-6E-2d	淡灰土	瀬戸陶器椀
14	15	9	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	46	16	44	27-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸焼小瓶
15	15	10	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	47	16	43	28-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸焼小瓶
16	15	11	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	48	16	45	29-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸焼小瓶
17	15	12	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	49	16	46	30-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス小瓶
18	15	13	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	土師器甕	50	16	47	31-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス小瓶
19	14	27	27-A	I6-16-6E-4c	褐灰土	須恵器杯蓋	51	16	39	32-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸美濃焼椀
20	14	17	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器杯蓋	52	16	40	33-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸美濃焼椀
21	14	16	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器杯蓋	53	16	48	34-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸美濃焼椀
22	14	55	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器杯蓋	54	16	41	35-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸美濃焼椀
23	14	14	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器杯身	55	16	52	36-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	瀬戸美濃焼八角皿
24	14	15	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器杯身	56	16		37-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
25	14	28	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	須恵器杯身	57	16		38-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
26	14	22	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器壺	58	16		39-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
27	14	21	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器壺	59	16		40-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
28	14	20	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器壺	60	16		41-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
29	14	23	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器壺	61	16		42-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
30	14	18	27-A	I6-16-6E-5c	落ち込みA-1	須恵器甕	62	16		43-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
31	14	29	27-A	I6-16-6E-5c	褐灰土	須恵器甕	63	16		44-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶
32	14	30	27-A	I6-16-6E-4c	褐灰土	須恵器甕	64	16		45-B	I6-16-6D-5j	機械掘削	ガラス瓶

実測遺物対照表

報　告　書　抄　録

ふりがな	かみがいといせき　2
書　　名	上垣内遺跡　Ⅱ
副　書　名	都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2016－1
編集著者名	西川寿勝
編集機関	大阪府教育委員会
所　在　地	〒540－8571　大阪府大阪市中央区大手前二丁目　℡06－6941－0351（代）
発行年月日	2017年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
上垣内遺跡（かみがいとい せき）	大阪府寝屋川市（おおさかふ ねやがわし）明和二丁目（めいわ にちょうめ）	27215	27	34°45′08″	135°38′43″	20150401～20150710	800㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上垣内遺跡	集落跡	古墳時代後期 中世	カマド付 竪穴住居	ナイフ形石器 土師器・須恵器 中国製磁器・土師質土器・瓦質土器	

要　約	平成26年度調査の西側（27－Ａ区）で、古墳時代集落の広がりを確認。北側（27－Ｂ区）は削平が著しい。

大阪府埋蔵文化財調査報告2016－1

上 垣 内 遺 跡 Ⅱ

－都市計画道路梅が丘高柳線の建設に伴う発掘調査－

発　行　大阪府教育委員会
〒540－8571　大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351（代表）

発行日　平成29年３月31日

印　刷　株式会社　近畿印刷センター
〒582－0001　柏原市本郷五丁目６番25号